



東松島ボランティアツアー (7月2日)

町長が大きな決断をしたのです。厳しい避難所生活に苦しんでいた被災者の方々に、わが町の温泉地に誘って、2泊3日でも無料でくつろいでもらうたらどうだろう、空いていた旅館も助かる、と言ったのです。有言実行のわが町の町長は、「町内温泉旅館無料宿泊招待リフレッシュプラン」を発表しました。避難所での集客やバスの手配を頼まれたわが社の従業員は、久しぶりの大仕事を受けて奮闘しま

した。通っているうちに、宮城県各地の被災状況、被災者のニーズ、ボランティアの課題などを把握しました。避難所を回りながら、大きな不公平が目につきました。人口の集中地に近ければ近いほど物資やボランティアは多いのですが、奥地に行けば行くほどいずれも少ないのです。また、ボランティアセンターでは団体は受け付けますが、個人のボランティアを受け付けなかったりしていました。



宮戸島ボランティアツアー (9月17日)

写真提供：株式会社トラベル東北

3月中には、代金返済以外に、被災した古川の店舗を閉鎖する諸々の手続きや、散乱した30年間の書類や商売道具を整理して山形の本社に運ぶ仕事もありました。それでも、3月末までに全員で頑張った結果、何とか通常営業を再開する段取りができました。しかし、お客さまの姿は、どこにも見当たりませんでした。正直言って、4月1日の段階で、震災後の混乱が収まりつつあったといっても、商売するという雰囲気ではありませんでした。3月20

被災地応援ボランティアツアーの誕生

日ごろまでに、インターネットを介して気仙沼の海岸沿いや離島に住む親戚の無事を確認できましたが、必要な物資や機材を届ける責務がまだまだ残っていました。昔住んだ東京の知り合いに頼まれて、あちらこちらに飲み水を届けたり、重病患者を山形の病院に搬送したりしました。旅行業的には、4月は大きな空白でした。

これらはいくつかの現状を踏まえて、トラベル東北の「被災地応援ボランティアツアー」が生まれたのです。ネットで個人を募集し、一つの団体に束ねました。そして奥地を求めて、被災者の依頼を直接受け仕事をしました。サラリマンやOL、学生や家族でも参加しやすいように、仙台発の土・日1泊2日のツアーとして以来、申込みが絶えずに毎週入ってきています。この3カ月、もっぱら奥松島の海苔生産の早期再開を手助けしています。水揚げの少ない被災地では、旅

館の食事はいつものレベルではありませんが、助けてもらった漁師の喜び、役に立ったボランティアの喜びで、ツアーが見事に成り立ちます。着地型旅行として準備している最上町のお城山ツアーやおくのほそ道ツアーには今年お客さまが全くと言っていいほど集まりません。それは日本国民の被災地への思いの結果として、仕方のないことだと思います。来春になれば、少しずつ元に戻らしましょう。それまでは、旅行業として被災地の応援事業に専念します。

東北の観光は再び輝く

山形県最上町の旅行会社・トラベル東北の代表取締役として大震災を体験した山口ステイブさん。本来のツアーの状況が厳しい中、新たに被災地応援ボランティアツアーを生み出すなど、東北の観光復興に向けて力強い取り組みを続けています。

株式会社トラベル東北代表取締役

山口ステイブ

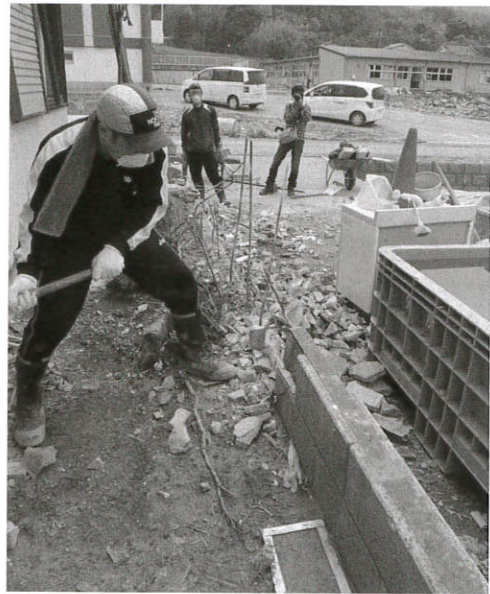


プロフィール
山口・ステファン (通称ステイブ)
1960年米国カンザス州ローレンス市生まれ。スタンフォード大学大学院修士課程修了。その間、日本留学センター留学、および東京大学大学院研究生の経歴を持つ。1994年日本国籍を取得。三菱商事(株)、(株)山口コーポレーション代表取締役等を経て2007年より現職。

大震災当日の衝撃

3月11日、山形県最上町の山中にて。愛犬のモモとクッキーを車に乗せ、除雪されないとどこまで山道を走って、停まってエンジン切りました。暖かい車の中で新年度の営業作戦を考えながら、犬たちは深雪の中で楽しそうに駆け回っていました。

その時、「あれ、これは何だ」と驚き、背筋を正して目と耳を張りました。停まった車が、左右に大きく踊っているのです。外に出て、犬を呼び集めました。道路の両側をそびえ立つ大杉も踊っていました。尋常ではない揺れに、杉の枝



牡鹿半島ボランティアツアー (6月4日)

に降り積もったパウダー雪が、一斉に落ち始めました。何が何だか分からない心境のまま、周りが脱脂粉乳の嵐となり、すぐそばにいたはずの犬をしばらくの間見失ってしまいました。

おそろおそろ町に戻り、事務所の二階に駆け上がりました。慌てて宮城県古川にあるわが社の古川営業所の所長に電話しました。「今のはすごかった。大丈夫？」と尋ねると、所長からは「命には別状はないが、店舗はめちゃくちゃ」と通告されたのです。「とりあえず今日は家に帰って、家族の安否を確認せよ」と指示し、テレビを付けて東北を襲った大震災の展開を信じられない気分で見守りました。

営業的に空白だった4月

その日の出来事が私の営業計画を台無しにしました。翌日からキャンセルの連絡が入り始めて、2週間と立たないうちに最後の一枚まで手持ちの旅行契約が解約されたのです。手提げ袋をお札で一杯にし、従業員が月末まで旅行代金を返しに歩きました。